

伊豆沼・内沼上流域ため池のオオクチバス駆除

ナマズのがっこう 三 塚 牧 夫

1. はじめに

「ナマズのがっこう」は、伊豆沼・内沼の周辺を拠点として活動する団体です。

平成 15 年に、伊豆沼・内沼の豊かな自然をとり戻し、周辺水田の生態系を回復するため、農家、地域住民、土地改良区の職員、宮城県農業土木職員有志、生態系の専門家、企業が集まり結成しました。

結成時の主な活動は、①「小規模水田魚道の開発・遡上実験・普及活動」、②「ふゆみずたんぼ（冬期湛水水田）による無農薬・無化学肥料水稻栽培の取り組み」、③「田んぼの学校の開催（農作業体験・田んぼの生きもの調査・こどもの環境教育）」でした。

それらに取り組む中、伊豆沼・内沼、その上流域ため池にオオクチバスが浸入し、在来生物の生息を大きく脅かしていることを知りました。

そこで翌年より、④「伊豆沼・内沼とその上流域ため池のオオクチバス駆除活動」を始めました。その中で、⑤「ゼニタナゴ・シナイモツゴ・メダカ・ニホンアカガエルの保全活動」、⑥「生き物の生息可能な排水路の工法（U型水路からV型水路）の検討」、⑦「ビオトープの造成」、⑧「湿地の保全や再生に対する支援」、⑨「水辺生態系の保全や復元に関する協働活動」、⑩「東日本大震災被災地小学校での環境学習活動支援」、⑪「ため池のアメリカザリガニ駆除」、にと内容を広げ、活動をしています。

2. 伊豆沼・内沼上流域ため池のオオクチバス駆除活動

環境省東北地方環境事務所の調査では、伊豆沼・内沼上流域に、大規模ため池が 170ヶ所あり、うち34ヶ所にオオクチバスが生息していると報告されています。

そこで私たちは、34ヶ所全部のバス駆除を目標に掲げました。

さらに、環境省の調査が及ばない小規模ため池が大規模ため池と同数程度存在すると推定されます。そのため、大規模ため池の駆除活動を実施する際には、同時に隣接の小規模ため池の所在とオオクチバスの生息を調査・確認しながら駆除を行ってきています。

また、伊豆沼・内沼に直接排水されている水田の農業排水路と排水機場遊水池の駆除も行いました。

駆除にあたっては、水系毎に上流部のため池から、下流の水田の農業排水路と排水機場遊水池までを一体的に行ってきました。

水系毎の駆除は、内沼に流入する①八沢川②太田川、伊豆沼に流入する③照越川④荒川の順に行っています。

平成26年末まで、大規模ため池34ヶ所の内、25ヶ所の駆除を完了しました。

八沢川水系、太田川水系、伊豆沼直接流入のため池の駆除は完了しています。

太田川水系のため池3ヶ所では再放流され、再駆除を2回行ったため池が2ヶ所、再駆除を行ったため池が1ヶ所あります。荒川水系ため池1ヶ所でも再駆除をしました。

他に照越川水系2ヶ所のため池に再放流され、再駆除が必要となっています。

また、環境省未調査の小規模ため池の池干しは22ヶ所実施し、うち18ヶ所のため池にオオクチバスを確認駆除しました。

3. ため池の池干しの方法

(1) ため池の管理者を把握し、池干しの了解を得ます。

(2) ため池の排水作業は次の手順で行います。

- ① 流下防止網をため池下流水路に2段に設置します。
- ② 取水施設や泥吐で排水をします。取水施設や泥吐がないため池では以下の方法で排水します
- ② 75mmの吸水ホースを利用してサイホンで排水します。吸水ホースには50mmのエンジンポンプで注水し、吸水ホース内にエアーがなくなったら排水を始めます。
- ③ サイホンで排水ができなくなったら、エンジンポンプや水中ポンプ（三相交流発電機を電源）で排水を行います。池干し当日2時間程度で排水可能な水位まで、前日までに排水します。エンジンポンプや水中ポンプは空転させないようにとごみが詰まらないように常時管理することが必要です。
- ④ 流下防止網のごみの除去作業はごみの流量に応じて行う必要があります。
- ⑤ 最後の排水は泥水まで排水可能な小型、軽量で高性能なフレキシ式水中ポンプを使用し完全に排水します。
- ⑥ 泥吐のあるため池は2週間くらい干しておきます。干せない場合は生石灰を散布します。
- ⑦ 貯水を開始したら満水の確認まで行います。

4. 駆除したため池の状況

八沢川水系のオオクチバス駆除をしたため池に、ワカサギ、ゲンゴロウブナを含むフナ類、ゼニタナゴ、シナイモツゴを放流した結果、在来の小さな水生生物は、オオクチバスがいなければ容易に増殖できることを確認しました。

ため池にバス釣りの姿はなく、ワカサギやゲンゴロウブナ釣りが見られるようになりました。

ヌカエビについては、最近伊豆沼や内沼、排水路等で捕獲できるようになりました。

平成27年からため池に放流してみようと計画しています。

5. 今後の活動について

目標の大規模ため池34ヶ所の完全駆除は、あと2年で完了できるように計画していきたいと思います。課題は資金と人材の確保です。公的機関が主体となって外来種の駆除を行ない、その中で活動団体への助成を考える必要があると思われます。

6. おわりに

平成23年3月11日に起きた福島原発の事故は、伊豆沼・内沼地域にも影を落とし、在来の淡水魚類からも放射性セシウムが検出されています。

私たちは、オオクチバスを駆除した沼やため池に、在来魚やエビ等が戻り、昔ながらの豊かな味覚を楽しみ、それらを都市住民に提供し、都市と農村の交流が図られ、ひいては地域の活性化を目指したいと思ってきました。

ため池にも放射性物質が蓄積されている可能性は大きく、食材として利用できるかの検査は必要不可欠なので、平成27年から取組みたいと思っています。